

第2章

科学映画祭の実施とそこから得られた知見について

久保正敏

総研大文化科学研究科・国立民族学博物館教授

1. 科学映画祭開催の目的

総合研究大学院大学(総研大)と国立民族学博物館(民博)の共同開催の形で、2006年度と2007年度に3回にわたって科学映画祭を実施した。その目的は、博物館という一般市民に開かれた場所で、サイエンス・コミュニケーションの一つの実践形態として科学映画を上映し、撮る側、撮られる側、見る側の三者による対話の場＝フォーラムを設け、その中から科学映画の持つ可能性と問題点を探ることにあつた。

映画の選定と提供にあたっては、CRNS (France), IRD (Institute for Research and Development, France), ISE (Informal Science Education program, US.), Smithsonian Institution (US.), etc. などの協力を得るとともに、科学映画制作や普及に携わってきた米国の研究者、プロデューサを招き、討論への参加を得た。

この科学映画祭を開くにあたっての我々の基本的なスタンスは、自然科学だけではなく、人文社会科学を対象とした、例えば「民族誌映像」なども、科学映画の一つと捉える点にある。なぜなら、自然科学は自然現象を、人文社会科学は人間を、それぞれ対象とするものの、常に先行研究を批判的に検証しつつ客観的な記述を指向するとともに、他の研究者による検証可能性に確保するために根拠となる事実を開示しながら、現象や事実の解明、他の要素との関係性を明らかにしようとする研究態度、これこそが科学的思考の態度であるが、これは両研究分野に共

通すると考えたからである。

2. 実施の経緯

2.1. 2006 年度「国立民族学博物館開館 30 周年記念 科学映画祭人と科学をつなぐ世界の映像 (Scientific Film Festival : Images that Connect Us to Science)」

会期:2007 年 3 月 19 日(月)～21 日(水・祝)

場所:国立民族学博物館講堂

主催:総合研究大学院大学 国立民族学博物館

プログラム

3 月 19 日(月)

13:00 開幕

開幕の挨拶 大森康宏(国立民族学博物館 民族文化研究部教授)

『科学映画の先駆者たち／The Pioneers of Scientific Cinema』(仏・20 分・白黒無声)。映画は当初娯楽ではなく科学的な目的で製作された。科学者にとっての映画とは？ 19 世紀の科学実験のレア映像を含む。

『科学者が映画製作に魅せられる時／When scientists discover a passion for filmmaking』(仏・97 分・白黒／カラー、一部無声)。ドキュメンタリー映画などで、時に役者として登場する科学者たち。彼らは自分たちが実は優秀な映画製作者であることに気づく。

『映画製作者が科学に魅せられる時／When filmmakers discover a passion for science』(仏・110 分・白黒／カラー)。1911 年製作の極地探検や 1954 年製作のキュリー夫人のエピソードなど、科学は映画製作者にとって映像美と想像力の宝庫である。

閉幕の挨拶 大森康宏(国立民族学博物館 民族文化研究部教授)

3 月 20 日(火)

13:00 開幕

開幕の挨拶 久保正敏(国立民族学博物館 文化資源研究センター教授)

『研究者、画家、製図者／Researchers, painters and draughtsmen』（仏・27 分・白黒／カラー、一部無声）。ルネッサンス時代の学者たちにとって唯一の分析ツールであった描画が、時代とともに科学の力でどのように変化していったのか。

『研究所・企業と映像／Cinema des institutions et des entreprises』（仏・80 分・カラー）。科学的な分野を扱う研究所や企業の記念事業や広報の目的のために、映像作家が特別に製作した貴重な映像の数々。

『海の暗号を解く／Cracking the Ocean Code』（米・45 分・カラー）。ゲノム解読の先駆者 C. ヴェンダー博士が、地球環境問題に役立つのではと、極微生命体の DNA を調べるため世界中の海を旅する。

『ブレイン・イメージング・ドリーム』（日・44 分・カラー）。ペットスキャン、エックス線、fMRI など多彩な最新医療機器の台頭で、今日の脳科学の領域は劇的に変化している。

閉幕の挨拶 久保正敏（国立民族学博物館 文化資源研究センター教授）

3月21日（水・祝）

11:00 開幕

開幕の挨拶 大森康宏（国立民族学博物館 民族文化研究部教授）

オープニング・リマーク デニス・リー・ミッチェル（ノーザン・イリノイ大学教授）

『プロテウス：19 世紀のビジョン／Proteus: A Nineteen Century Vision』（米・60 分・カラー）。19 世紀、「深海」は「宇宙」と同義だった。摩訶不思議な深海生物を通して、「科学とアート」の幻想的な神秘的融合を試みる。

12:10 午前の部 終了

13:00 午後の部 開始

開始の挨拶 大森康宏（国立民族学博物館 民族文化研究部教授）

『科学はフィクションである：ジャン・パンルヴェの映画／Science is Fiction: the films of Jean Painleve』（仏・52 分・白黒／カラー、一

部無声)。科学映画のパイオニア、J. パンルヴェが描く不思議の世界。タコや吸血コウモリの生態、タツノオトシゴのオスの出産シーンは秀逸。

『ガラパゴス／Galapagos』（米・40分・カラー）。170年前にダーウィンが訪れたガラパゴス。この島で最新の科学技術を駆使して現代版「種の起源」を探る女性海洋生物学者の探検。

解説 ローレンス・オレイリー（『ガラパゴス』エグゼグティブ・プロデューサー）

総括 ヴァレンタイン・カース（全米科学財団プログラム・ディレクター）

質疑応答

デニス・リー・ミッチェル（ノーザン・イリノイ大学教授）

ローレンス・オレイリー（「ガラパゴス」エグゼグティブ・プロデューサー）

ヴァレンタイン・カース（全米科学財団プログラム・ディレクター）

久保正敏（国立民族学博物館 文化資源研究センター教授）

大森康宏（国立民族学博物館 民族文化研究部教授）

閉幕の挨拶 大森康宏（国立民族学博物館 民族文化研究部教授）

2.2. 2007年度「科学映画祭 人と科学をつなぐ世界の映像 (Scientific Film Festival: Images that Connect Us to Science)」

会期:2008年1月12日(土)～13日(日)

場所:国立民族学博物館講堂

共催:国立民族学博物館 総合研究大学院大学 千里文化財団
プログラム

1月12日(土)

13:00－17:00

あいさつと趣旨説明

『究極の粒子／L' Ultime Particule』（仏・58分・日本語通訳）。物質を

構成する究極の素粒子は何か？CERNにおける最新研究成果を紹介する。

『アンタレスのニュートリノ／Les Neutrinos D'Antares』（仏・6分・日本語通訳）。宇宙からやってくるニュートリノを捉えようと、フランス・ツーロンの地下2500メートルに作られた観測施設の紹介。

『高エネルギー加速器研究機構(KEK)の研究者たち』（日本・50分）。KEKで研究する最先端科学者たちの生活と意見を紹介する。

『南極のチリ／Poussieres du Pole』（仏・30分・日本語通訳）。南極の氷に含まれるチリの分析から、太陽系の過去を探る。

『ロザリンド・フランクリン—DNAのダークレディ／Ou La Véritable Histoire de la Découverte de L'AND』（仏・52分・日本語通訳）。DNAの二重螺旋構造の発見で1962年にノーベル賞を受けた3名の男性科学者の陰に、それ以前に発見していたものの早世した女性科学者ロザリンド・フランクリンの存在があった。なぜ彼女の功績は無視されてきたのだろうか？

トークとミニ・シンポジウム：総合研究大学院大学関係者ほか

1月13日（日）

11:00－12:00

あいさつと趣旨説明

『地球の薄暮／Global Dimming』（英・49分・日本語通訳）。過去400万年で地球が経験したことのない日照量減少という気候変動が起ころうとしている。もし科学者の言うGlobal Dimmingという予測が正しいければ・・・？

12:00－12:40 休憩

12:40－14:30

『夏のない年／The Year Without Summer』（英&仏・50分・日本語通訳）。200年前にジャワで起きたTambora山の爆発、その1年後に起きた欧米での飢饉。二つの事件を結びつける初めての研究から何が見えてくるだろうか？

『恐竜は生きている！／Dinosaurs Alive!』（米・40分・日本語通訳）。

三疊紀から白亜紀にかけての化石研究から、恐竜の子孫は今も生きていることが分かった。リアルなCGも交えた研究最前線の紹介。

トークとミニ・シンポジウム: ゲスト・スピーカー Mr. Laurence O'Reillyによる解説とサイエンス・コミュニケーションから見た科学映像に関するミニ・シンポジウム。

2.3 2007 年度 「科学映画祭 外国から見た日本文化 (Scientific Film Festival : Japanese Culture Filmed by Others)」

会期: 2008年2月9日(土)～10日(日)

場所: 国立民族学博物館講堂

共催: 国立民族学博物館 総合研究大学院大学 千里文化財団
プログラム

2月9日(土)

12:30 - 14:30

あいさつと趣旨説明

『老人と海/Uminchu: The Old Man and the East China Sea』(米・101分・日本語音声)。昔ながらの漁法を続けてきた与那国島の82歳の漁師が語る海と漁。撮影直後に溺死した彼の生涯への鎮魂歌である。

14:30 - 15:30 休憩(みんなくウィークエンド・サロン)

15:30 - 17:30

『Doubles: Japan and America's interracial children』(米・83分・日本語音声)。第二次世界大戦後、日米両国に数多くの日米ダブル(ハーフ)世代が生まれた。二つの文化を背負った彼らの現在はいくつどのような問題を提起する、民族学はじめ各分野必見の映像。

トークとミニ・シンポジウム: ゲスト・スピーカー Ms. Elaine Charnov、民族学関係者および総合研究大学院大学関係者。

2月10日(日)

12:30 - 14:20

あいさつと趣旨説明

『歩き遍路』（スイス・73分・日本語音声 英語字幕）。2004年－2005年にかけて、四国88ヶ所を巡るお遍路さんへのインタビューを通じて、人はなぜ巡礼するのかを問う、スイス人映像人類学者Tommi Mendelの作品。

トークとミニ・シンポジウム：ゲストスピーカー Ms. Elaine Charnov、Tommi Mendel、国際問題の研究者など。

14:30－15:30 休憩（みんなくウィークエンド・サロン）

15:30－17:30

『White Light, Black Rain（「ヒロシマ・ナガサキ」）』（米・120分・日本語音声）。20万人を超える被爆者の現在を追う。当時の写真やアメリカ軍撮影のフィルム、被爆者が書いた絵なども交え、悲痛なメッセージを伝える、アカデミー・ドキュメンタリ賞監督スティーヴン・オカザキの入魂作。日米両国で話題となり、各地の映画祭でも上映されて多くの感動を呼んだ作品。

3. 議論から得られた知見

科学映画祭におけるこれまでの議論のなかで明確になってきた論点を整理しておく。まず、科学映像は、専門家同士、あるいは、専門家と非専門家との間でのコミュニケーション・ツールとして位置づけられる。

3.1 科学映像の役割

(1) 科学研究の記録

自然科学、人文社会科学を問わず、スケッチや図による観察や研究過程、研究結果の図的記録は、研究自体の進展に必須であった。写真術の端緒であるカメラ・オブスキュラがスケッチの写実性を求めるなかで発明されたことに示されるように、ビジュアル・メディアは、記録性をまず追求し、人間の目では不可能な瞬間や極小・極大の世界を切り取る手段として発展し、人間の視覚を拡張してきた歴史は周知の通りであ

る。写真術の発展形としての映像の発明は、時間操作を可能とすることにより人の視覚をさらに拡張してきた。

これらビジュアル・メディアは、その登場直後から学術研究にも盛んに応用されてきた。科学映像も、第一義には研究の手段であり、かつ他の研究者にとっては、当該研究の経緯や成果の根拠を得るための、あるいは自身の新たな研究にとっての素材でもある。さらに言えば、極めて情報量の多い映像には、その撮影者や製作者が意図していなかった、あるいは気付かなかった情報も記録されている。この点からも、科学映像は時空間を超えた研究資料となり得る可能性を持つ。

時空間を超える資料という意味では、記録された映像は、科学研究史の研究にとっても、あるいは有形、無形の文化遺産の記録としても、極めて貴重な資料となる。この点から見ても、科学映像のアーカイブズ構築は、極めて重要な課題である。ビネガー・シンドロームに代表されるような光学フィルムの劣化問題への対処も含めて、全国の研究機関に所蔵されている記録映像を如何にして組織的にアーカイブズ化するか、その場合においても保存と利用のバランスをどのように考えて行くか、議論を巻き起こす時期に来ている。

(2) 非専門家への研究活動自体と研究成果の発信

サイエンス・コミュニケーションとは、研究者やそのコミュニティから、外部に向けて科学研究活動を分かりやすい形で告知し、情報を共有しつつ外部も交えた議論の場を作り出すものである。その科学研究がどのような背景で企画され、どのような過程を経て遂行されてきたか、その成果がどのような形で社会に還元され人びとの生活や文化に関わっていくのか、を分かりやすい形で提示し、科学研究がまた人間活動の重要な要素であることへの理解を促すとともに、様々な議論を巻き起こす契機となるような双方向性のコミュニケーションの手段として、科学映像は極めて有効なものと考えられる。

その映像スタイルとして、科学研究の理論、方法論、成果を専門領域の映像や言葉で表現する deep science タイプのものと、デフォルメと

簡略化、短縮化を図り印象的な「絵」を中心に構成するタイプのもの、および、それらの様々な中間形があり得る。映像製作側の意図と対象の視聴者層に応じたスタイルを考える必要がある。

(3) 視聴者が行動を起こすように促す映像

ショッキングな映像も含む視聴者への訴えかけによって、環境問題などでの視聴者の行動を促す映像も科学映像の一つのタイプであり、ローレンス・オレイリー氏によれば、“advocacy-type” filmと呼ばれるものである。しかし、氏が指摘するように、時には、視聴者の印象を強くするための演出として、誇張や省略が施される映像も少なくない。視聴者には、映像の持つ圧倒的な情報量に翻弄されたり内容を鵜呑みにするのではなく、他の情報とも付き合わせて批判的に判断する目が求められる。実はこれこそが科学的な精神である、ということも合わせた、「映像リテラシー」の涵養が必要である。

(4) 若い世代への教育素材としての科学映像

若い世代における科学離れが言われて久しい。戦後日本の科学技術立国政策は、技術発展をもたらした一方で、科学に対する盲信を含んだ「科学信仰」を生み出してきたと考えられる。宗教カルトの中に「科学」を冠するものが多く見られることもその証左であろう。実は同じような状況が米国でも進行しているようだ。筆者は2006年3月にニューヨーク自然史博物館の科学教育部門ヘッドと懇談する機会を得たが、その中で、米国民は、大学は政治的に左翼偏向していると考えており、博物館が情報源としては最も信頼されている、さらに、自然科学は教会のように絶大な信頼を得ている、という話を聞いた。逆に言えば、自然科学に対する米国民のリテラシーが低下し科学技術がブラックボックス化している訳で、これが学校教育で大きな問題になっているらしい。1957年のスプートニク・ショックで自然科学教育が重点化された流れが米国では継続していると思いこんでいた筆者にとって意外であった。米国では学校教育と博物館の連携が盛んに進められている理由の

一つも、この危機感にあるようだ。

教育素材としての科学映像は、若い世代に、科学と技術を批判的に見る科学的精神の重要性を訴える手段となり得るはずである。ただし、一方では、科学的探求の面白さ、楽しさをも訴求する映像でありたい。と同時に、科学映像は自然科学に偏重するのではなく、人文社会科学研究の面白さを伝えるとともに、科学研究が人間、社会、文化に根ざしたものであることへの理解を促進するものでありたい。

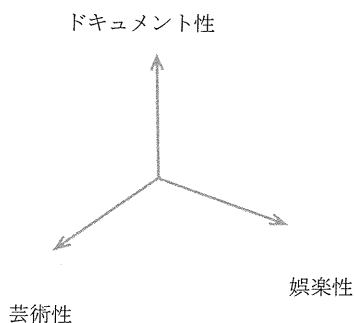
3.2 科学映像の製作側と視聴側:映像リテラシーに関して

(1) 科学映像に含まれる要素

科学映画祭での議論の中から、科学映像を製作する姿勢に関わるいくつかの要素が明らかになってきた。図に示すように、これをパラメータとする3次元空間によって、科学映像を分類することも可能だろう。

一つは、映像のドキュメント性である。客観的な記録を志向するか、演出を加えるか、という軸である。もとより、映像は撮影者や製作者による現実世界の切り取りに過ぎないのであって、純粋に客観的な記録ではあり得ないし、製作側がメッセージを込めるために演出を加えることも当然である。しかし、これらを前提とした上で、製作側の意識の表れがどちらに向かうか、を示すパラメータである。

もう一つは、芸術性の軸である。映像が美しいか否か、視聴者に感動を与えるかどうか大きな要素であることが、議論のなかで確認された。実際、自然科学映像の中には、結晶、生命、宇宙など自然の造形の美しさが感動を呼ぶもの、また人文社会科学の映像にも、人の生きる姿



や愛憎が共感を呼ぶものがある。被写体に注がれる製作側の眼差しが、出来上がった映像には如実に表れる。製作側の感動や共感を視聴する側にも共有して欲しいという作り方が、そうでないかによって、映像の芸術性に差異が生まれるのであろう。

さらにもう一つの軸は、娯楽性である。意外性や驚きなど、視聴側を楽しませようという製作側の演出が映像に娯楽性を生み出す。おおかたの視聴者は、商業映画の原点である娯楽性に対する一定の評価眼を既に持っており、その彼らを引きつける魅力を備えていないと、メッセージを伝えることもできず、今後も科学映像へ誘因することができない。その意味で娯楽性は科学映像にとっても必須の要件であらう。

(2) 視聴側と視聴側との間でのメッセージのずれ

これらの要素を組み合わせで作られた科学映像が発信するメッセージが、視聴側にどのように受信され解釈されるか、両者のギャップを小さくできるかどうか、が映像を用いたサイエンス・コミュニケーションの可能性と限界を考えるうえでの課題である。

製作側には、視聴側の受容を考えただけで、企画、映像のタイプ、シナリオ、最終的に何を伝えたいかの目標、対象となる視聴者層、などについて、科学者、プロデューサー、カメラマン、編集者の間での徹底した討議が必要である。米国で『ガラパゴス』を製作した際には、各セクターの役割の明確化したうえでチームを組み、撮影から完成に至るすべての段階で、常に徹底的な討議を加えながら進める手法がとられたことが報告された。特に、科学者の意図と映像製作の手法との間での議論を通じた意思疎通の重要性が強調された。また、同じ映像素材を使いながらも、視聴者層ごとに異なる編集や手法で映像を製作することの必要性も指摘された。

視聴側は、自分なりのメッセージの受信と解釈を行う訳だが、常に、過剰な納得、過剰な評価、誤解、などの入り込む余地がある。このディスコミュニケーション状況を最小化するには、視聴側に「映像リテラシー」を涵養することが必要である。従来から言われているように、特

に1950年代のテレビの普及以降、フランス、米国、カナダなどでは学校における映像リテラシー教育が進んでいる。この教育も含めてこそ、サイエンス・コミュニケーションが成立する。

3.3 科学映像の視野

科学研究は、人間活動そのものでもあり、各研究には社会・経済・文化の影響が必ず投影されているに違いない。そうした背景の情報にまで踏み込むかどうか、によって、科学映像は二つのタイプに分けられるだろう。

(1) ズームイン型の映像:科学的発見や科学現象自体の詳細な記録。しばしばdeep science映像とも呼ばれる。

(2) ズームアウト型の映像:科学研究活動の背景(研究者の生き方、社会経済状況、科学者コミュニティの動きなど)も描くもの。例えば今回の映画祭で上映された『ロザリンド・フランクリン—DNAのダークレディ』は、DNA構造の発見とノーベル賞受賞にまつわる、友情、競争、嫉妬、人種差別、人の生き方などを含め、研究過程を紹介したもので、科学研究がまさに人間くさい活動であることを示している。

ズームイン型映像は、科学教育あるいは科学研究者自身の記録や研究記録に向けられるものであるのに対し、ズームアウト型の映像は、非専門家に対して人間活動としての科学研究を発信し、より身近なものとして科学研究を紹介する点で、サイエンス・コミュニケーションの手段として有効ではないだろうか。

また、ズームアウト型映像は、研究主体である人間をも描くことになるから、自然科学研究と人文社会学研究との類似性を示し、両研究分野のギャップを埋める可能性を持つ。またこうした映像は、当該研究分野の研究者にとっても、自らの研究分野をもう一度広い視野から見直す機会となるから、専門分化が進みすぎた研究分野を再統合するきっかけとなり得るであろう。

3.4 科学映画祭の上映形式

今回、国立民族学博物館講堂で開催した科学映画祭は、必ずしも多くの参加者を得た訳ではない。同一の時空間を共有することが、情報共有と議論のフォーラムを形成する基本ではあるが、科学映画祭への参加者が多い欧米に比べ、科学映像に関心のある者の少ない日本では、固定した空間で行う映画祭形式に限界があるのかも知れない。

そこで、フォーラムをより拡張する方法の一つとして、「ウェブ上での科学映画祭」の形式も考えられないだろうか。その場合、映像提供側には、申し込み者のみへのネット配信を劇場での上映と同等とみなして利用を許諾する柔軟な対応を求めねばならない。また、登録申請した利用者間ではウェブ上での意見交換を可能とする仕組みが必要だが、これには、wiki など既存の技術で十分対応可能である。

もちろん、閉鎖空間で映像を視聴する際に得られる「没入感」が、映像メディアにとって必要な要素の一つであることを認めただうえで、科学映画祭をより拡張する方向性としてウェブ映画祭を提案したい。

記録:

みんなくシネマ—科学映画祭—
人と科学をつなぐ世界の映像

2008 年1 月12 日(土) 13:00 ～17:15

『究極の粒子』

『アンダレスのニュートリノ』

『高エネルギー加速器機構(KEK)の研究者たち』

『南極のチリ』

『ロザリンド・フランクリン:DNA のダークレディ』

トークとディスカッション

2008 年1 月13 日(日) 10:30 ～14:15

『地球の薄暮』

『夏のない年』

『恐竜は生きている!』

トークとディスカッション

1 月12 日

趣旨説明

久保正敏

国立民族学博物館 文化資源研究センター教授

「みんなくシネマ 科学映画祭」は、2007 年3 月にひきつづき、今回で第2 回目の開催となります。このたびは、自然科学だけでなく、人文・社会科学の映画も上映いたします。

今日と明日は、自然科学系を中心に映像を見ていただきます。本日は5 本の映画を上映いたします。1 本をのぞいて、すべてフランスで制作されたものです。

自然科学のような科学映画、映像にもいろいろな立場のものがあっ

て、科学の研究内容や成果を紹介するもの、あるいは科学的な活動そのものを紹介するものなどがあります。科学者自身、または科学者の世界を描くというものもあると思います。

本日提供する映像にも、そのような科学のコミュニティの話、別の言い方をしますと、科学に関わる人間をとらえた映像もあります。幅広いジャンルの科学映画を提供できる機会となると思っております。ぜひ楽しんでいただきたいと思います。

上映のあとに、科学映画の可能性や、科学映画が市民とのコミュニケーションのツールとしてどのように活用できるのかといった可能性、そしてその問題点、限界についてみなさんともお話できればと思います。

ディスカッション

参加者

平田光司 （総合研究大学院大学教授）

久保正敏 （国立民族学博物館教授）

大森康宏 （立命館大学教授）

森田洋平 （高エネルギー加速器研究機構広報室室長）

ローレンス・オレイリー （元国立自然史博物館展示ディレクター）

平田 私の専門は物理学ですが、最近では科学と社会とのコミュニケーションやそこで生じるさまざまな問題について、おもに研究しております。

最初に、今回の映画祭の統括者久保先生から、ねらいや、科学映像についてどのように考えられたのかについて簡単にご紹介いただきたいと思います。

久保 今回は、自然科学映像と人文科学映像を組み合わせた映画会になっています。さらに、外国で制作された映像を中心としていくことが特徴です。それは、できるだけ外国の作品を紹介していきたいということにも、ねらいがあるからです。

科学も、人間活動のひとつです。つまり自然科学も人文科学も、人間の活動という観点では、世間と無関係に成り立っているものではなく、その時代の社会情勢や政治、科学者の出身地の文化に影響を受けているのではないのでしょうか。そういったことも含めて、科学映像をみなさんと一緒に考えていきたいということも、ねらいのひとつです。本日最後に見たロザリンド・フランクリンをとりあつかった映画には、男性女性の問題や、ユダヤ人の問題など、さまざまな内容が含まれていました。映像はいろいろな視点で語ることができるという意味でも、興味深かったと思います。

平田 最初に上映された『究極の粒子』のなかでは、ウランの原子核分裂発見に関して、オットー・ハーンとフリッツ・シュトラスマンだけがとりあげられていました。ノーベル賞をもらったのもこのふたりなのですが、ユダヤ人の女性物理学者リーゼ・マイトナーがとても大きな役割を果たしていたということが、現在ではよく知られています。ロザリンドとも時代はほとんどおなじですし、彼女の場合と似ていると思いました。

大森 日本では、人文科学に関する映像はたくさんありますが、自然科学の解明過程をとらえた映像は、個人制作はあっても、まとまったプロジェクトとして制作されているものは、ほとんどないということがわかりました。

一方、外国では、科学の解明過程をしっかりと映像に記録しています。たとえば、フランスでは、キュリー夫人に関する映像が、感心するほどしっかりとした状態で残っています。日本の科学者たちの様子を記録しておけば、将来何かのかたちでドキュメントとして役に立つ時が来るのではないか、それは、今からでも遅くないと考えています。

まず手始めに、高エネルギー加速器研究機構の研究施設、Bファクトリーを1年半にわたって撮影させていただきました。そこで働く人たちが、どのような思いをもっているのか、仕事の流

れはどういうものなのかを、本人たちの言葉を積み重ね、表現することに努めました。完璧とはいえないとは思いますが、将来これがきっと何かの役に立つのではないかと、またフィルムはもっと長い時間のものがありますので、それを使って別の構成ができるのではないかと期待しています。

平田 総合研究大学院大学では、今回の映像も含め、科学映像を整理し保存しています。これをアーカイブズといいます。基本的にだれでも自由に使えるようにしたいと思っています。

映像作品が残るだけでなく、もととなったすべての資料が残るのがアーカイブズです。映像に限らず、日本はこれが非常に弱いのです。書類をまとめて廃棄してしまう習慣があるように思っています。ですから、資料をしっかりと残して、だれでも使えるようにするというところを始めたところです。今回の大森先生の作品が、それを利用した初めてのものです。

森田 私はアメリカのフェルミ研究所で博士号をとりました。『究極の粒子』に出てきたSSCという計画にも加わっていました。そういったこともあって、作品の中でインタビューを受けている研究者達は皆さん知り合いです。映像も見慣れた風景だったので、個人的には思い入れがありました。

現在、私は高エネルギー加速器研究機構の広報室室長をしています。映像のアーカイブズプロジェクトの一環としてBファクトリーの映像を作っていただきました。この作品では研究者ひとりひとりが生き生きと語っており、日常の現場そのままの状況が再現されています。広報の立場での映画制作の場合、個人が前面に出てくるような方法は、とてもできません。その辺のやりかたは、今後なんらかのかたちで生かしていきたいと思っています。

平田 ロザリンド・フランクリンの映像では、昔の手紙などが多様に活用されていますね。日本では、そういうものを探そうと思っても、なかなかみつからないという根本的な問題があります。

オレイリー 科学映像のアーカイブズが日本では立ち後れているということですが、非常に重要なことなので、ぜひ継続していただきたいと思います。科学は基本的にはテクニカルな部分が多いので、ロザリンド・フランクリンの映像のような人間性を描いた要素とどう結びつけていくかは、大変難しい問題です。でもそのような取り組みはとても重要なことだと思います。近年の科学的な活動は、大きなグループでおこなわれています。論文でも、名前だけで数ページもかかるようなものもあり、個人をとりあげるのが難しくなっていく状況にあります。そういう意味で、大森先生の映像は、そのひとつの答えになるのかもしれないと思います。

会場 本日の映像を見ていて、科学は本当にニュートラルなものなのだと感じました。生命のことにしても、素粒子のことにしても、それがどういう社会的な意味をもつのかとは離れて存在しているのだとよくわかった気がします。そうなってくると、映像が、どういう価値観のなかで表現されていくのかが、重要だと感じました。生態系や生命の大切さを基礎において、こういった情報を集積していただきたいと思います。

大森 映像制作のなかで、重要視していることがあっても、99 パーセントの人たちが価値を置かないことであるかもしれません。最終的には歴史が決めていくことだと思います。自分が死んでから、もっとずっと先のことになるかもしれませんが、映像のなかで語られていることの重要性が発揮されるかもしれない。それでいいのだと思うのです。自分たちのおこなっていることを蓄積していくことが必要だと思います。

会場 誰に、どのように発信するのかが、科学映像を語る上で重要だと思います。大森先生は、制作した映像をいま見ても、もしかしたらだれもわからないかもしれないとおっしゃられていましたが、いま見てもらうとしたら、誰を対象に作ったのか、作ってい

くのかということに興味があります。

大森 今回お見せした映像は、科学者や、ある程度物理学のことを知っている人を想定してつくっています。もう少し変えれば一般向けになるように思います。そのためにはナレーションをつけたり、説明不足なところを時間をかけて撮影しなければなりません。

久保 すべての情報をアーカイブしておいて、それを目的に応じて編集して、一般向けとか、より専門家向けとか、そういうこともできると思います。アーカイブすることと、それを解釈して編集すること、さらにそれを見る人が解釈すること、いろいろな問題がからまっているという、おもしろい世界だと思います。

平田 映像の利用は、撮影した人のまなざしがやっぱり感じられることがあるので、ある人が撮ったものを、ほかの人が使えるかどうかということとは、難しい問題だと思います。

大森 ある人が撮った映像に、ほかの人が撮影したものを組み合わせ、新しい映像を作ることができるのではないのでしょうか。

会場 映像を保存する際に、いままでフィルムだったものがデジタルデータでおこなわれるようになってきていると思います。このように、保存媒体が、大きく変化していくことに対し、今後どのように対処されていくのでしょうか。

平田 フィルムは、ただ置いておくだけではあつというまに劣化してしまいます。欧米、とくにヨーロッパは映像の保存に熱心です。ほぼ真空状態で密閉し、窒素ガスを充填して、マイナス20度のシェルターのような保管庫で保存しています。日本ではそこまでやっているところはありません。貴重な映像をどう保存するのかということは大問題です。総研大では、撮影はデジタル・ハイビジョン仕様ですから、そのまま映写には使えます。しかし、保存するにはフィルムに移すのがいちばんではないかと思っています。映像にかぎらず、アーカイブズの専門家は日本にはほとんどいないのです。そのような専門家の職場

があるような状態ではないのです。国文学研究資料館にはアーカイブズの専門家がいます。そこを中心として、アーカイブズの重要性を世の中に訴えていかなければならないと思います。徐々に世の中のみなさんにも、わかっていただけたらいいと思います。将来はもう少し明るいのではないかと思います。

大森 スtockホルムのフィルムライブラリーで、現在特許を取得しようとしている保存方法を聞いてきました。従来の真空パックにする方法は、ひとつのフィルムを、一週間真空状態にして置いて、中にはいつている気泡なども全部取り除いてからパックするものですが、これにはお金も時間もかかります。新しい方法は、真空ではなくて、特殊なガスを入れ、マイナス7度で保存することによって、フィルムの変化を止める事ができるというものだそうです。この装置を、ワシントンと共同で新しいシステムとして設置するそうです。

日本ではそこまでできません。民博でもせいぜい12、3度、40から50パーセントの湿度で管理しています。どうしてもフィルムの劣化は避けられない。しかしながら、デジタルのものよりはずっと長持ちするのです。平田先生もおっしゃったように、デジタルでとったものをフィルムに焼き直して、それを保存するというのが、将来的には一般的になっていくのではないかと思います。

フィルムに撮られたものをどう活用するのも大きな問題です。デジタル化したメディアがいろいろ出てきて、ますます変化していくと思います。

久保 ただ、零下何十度で保存してしまうと、それを常温で使える状態にしようとなると何ヵ月もかかって結局使えません。本当に「フリーズ」してしまうのです。保存用と、利用用というものと、二方向考えなければいけないと思います。

平田 森田先生は、大森先生が撮られたような映像を広報の立場として利用することの可能性や提案などありますか。

森田 今回の映画祭は、硬派なアプローチで、コアな人たちがじっくり

見るのに適したものだと思います。広報をやっている最近思うことは、短い映像でわかりやすくおもしろくというのが時代の風潮となってきたということです。インターネット上の動画共有サイト、たとえば「YouTube」では、最長でも10分間しかアップロードできなくなっています。パソコンで映像を見ようと思っていても、集中力が続くのはせいぜい2、3分です。そのあいだにどうアピールできるのかも、広報的な立場で考えていかなければならない時代になってきています。そういう意味で若い世代の興味をひきつけて、今日のような硬派な映画祭にも足を運んでもらうという仕掛けは必要だと思います。最初の映画のなかでも、ヒックス・ボゾンという粒子を、大統領の前で9分間で説明するシーンがありましたが、まさしくそのような状況に直面しているわけです。みんな忙しくなっていて、わかりやすいものを求めるような時代になってきています。知的好奇心を刺激して、この映画祭のような場所にも足を運んでもらえるような、人口を増やしたいと思います。

平田 まったく私も同意見です。こういうディープな映像と、インパクトのある映像は、両方とも必要で、両者をうまくつなげることが重要な課題だと思います。

『究極の粒子』でも、ロザリンド・フランクリンの映像でも、原爆の映像が使われていました。非常にインパクトのある映像だと思いますし、また科学においても重要なものだったのかなと思います。原爆の映像はたくさんありますが、今回の映画祭2月10日には『ヒロシマ・ナガサキ』という新しい映像が紹介されます。

1 月 13 日

趣旨説明

久保正敏

昨日に引き続き、科学映画祭を開演いたします。昨日はおもに、フランスの作品、とくに核物理やDNA といったテーマを選びました。本日はアメリカ、イギリスの作品で、おもに環境問題という私たちにより身近に感じられる問題をテーマとする映像を3本ご紹介いたします。

1 本目は『地球の薄暮 (はくぼ)』で、空気中の汚染物質によって日照時間が減っているのではないかというものです。9・11 事件のあと、アメリカでは3日間飛行機が飛ぶのを禁止されました。それによって1日の温度差が少し変化したといわれています。汚染物質が地球の環境にずいぶんと影響を与えていて、地球の温暖化とどうかかわるのかがテーマとなります。長いレンジで我々の地球環境を考えるきっかけになればと思っています。

休憩をはさんで2本の映像ののち、科学映像の制作に深くかかわっておられるアメリカのローレンス・オレイリーさんにお話をいただきます。自然科学映像がもつ意味や問題点、たとえば、いかにドキュメント性を高めるかということと、エンターテインメント性をどう高めるかという、しばしば相反するように思われるものをどう解決するか、といったこともトークいただきます。

解説

ローレンス・オレイリー

Laurence O'Reilly

元国立自然史博物館 展示ディレクター

映像には主にふたつの構成要素があると考えています。そのひとつを私はエクステリア(外観)とよんでいます。映像が物事をどのようなかたちで紹介しているかという要素です。

今、スクリーンでお見せしているのはタツノオトシゴです。この写真はスミソニアン研究所の科学者から提供を受けたX線画像です。この写真は、もうひとつの要素、物事を内部構造から見ること、つまり批評的視点から本質を見抜く必要があるということを象徴しています。本日会場には科学者の方々が多数おみえになっていると思います。映像制作における科学者の役割、撮影者など制作者との連携のなかで、科学者の企図がどう表現されているのかなど、是非ご意見を頂戴したいと思っています。

昨日、今日の2日間で8本の映像作品を上映しました。それぞれの作品、すべてが異なっています。高エネルギー物理学や粒子物理学といった表現するのがとても困難な題材の作品がありました。これらの作品では研究者自身に焦点をあて、物理学を説明するという手法をもちいていました。

それとは対照的に、最後に観ていただいた作品はIMAXの観客のために制作された作品です。ほかに、科学と娯楽のバランスをとった作品もありました。

昨年の3月、ここ国立民族学博物館で開催された最初の科学映画祭では、科学をどう一般の人びとに翻訳していくかという課題がもちあがりました。この課題の重要性は日々認識しております。私はスミソニアン研究所で展示プログラムの責任者を務めておりました。その職を通じて、研究者と一般市民のあいだにギャップが生じていることに気づきました。そしてそのギャップは大きくなる一方でした。日々高度化し複雑になる学問は、専門的知識を有する人にしか理解することが困難になってきています。そういう時だからこそ、科学を翻訳する人たち、ジャーナリストや映像制作者には重要な任務が与えられています。

今朝上映した作品『地球の薄暮』を例としてとりあげます。この作品は大きな影響力をもっています。地球科学分野でもっとも権威のあるワイルド・スクリーン・フェスティバルで賞に輝いています。私はこの作品をアドボカシー（提言）作品と呼んでいます。作品のオープニング

に「この作品は、あなたに行動を起こすことを求めます」という表示ができます。ここでの「あなた」とは観客を指しています。このような作品を観るにあたっては、注意深さ、批評的に観ることが必要です。単に怖がらせる作品なのか、正当な科学なのか、あるいは、適正な科学の利用なのか、過剰に利用したものなのかということ等をしっかりと考えて欲しいということです。

スミソニアン研究所も国立の機関ですので、展示や映像をはじめ、取り扱うあらゆるメディアにおいて、事実にもとづいた事なのか細心の注意をはらってきました。『地球の薄暮』は、少なくともそのタイトルに関して、行き過ぎているのではないかという疑問をもっています。映像自体も、「火災」「飢饉にあえぐ何万もの人びと」「溶けてゆく氷河」など強烈なイメージが使われていました。

2日間で8本の映画を観ましたが、特にこの作品は大きな課題に直面していることに気づかされました。作品のなかであらゆる情報、私自身、聞いたことがない事柄が次々と伝えられました。皆さんはこの映画をご覧になって何か行動に移したいと思うことがあったでしょうか。何か価値を見いだすことができたでしょうか。このような問いが、映像を観る側だけでなく、創る側にも必要な批評的に考える能力であると考えます。

『夏のない年』は、まったく異なるスタイルでした。『高エネルギー加速器研究機構の研究者たち』も、さらに違ったスタイルでひとりひとりの科学者に焦点をあて、それらの人びとの仕事模様を伝える映像でした。

科学を映像作品に使用する際、主張を訴えるためなら過剰になっても良いのでしょうか。それとも、保守的な姿勢で取り組むべきなのでしょうか。

事実の正確性は世界じゅうの科学者が共有している課題です。ここで皆さん、特に科学映画の制作において、プロデューサー、ディレクターたちとチームを組み、アドバイザーを務めていらっしゃる科学者の方々にお聞きしたいことがあります。科学アドバイザーにとって、誰

が作品の責任者なのか、もしくは主旨をつかんでいるのかを明確にすることが重要になってきます。また、科学アドバイザーは、例えば「科学的事実をもう少し和らげる必要がある」などの助言をしていかなければなりません。

『地球の薄暮』のように主張性の強い作品に、ご自身が科学アドバイザーとして関わっていた場合、作品の主旨を変えるよう助言したでしょうか。

科学映画制作チームのなかで、科学者の役割は何なのでしょう。作品を見直し、事実が正確なのか調査するだけの役割なのか、それとも、具体的に提言する役割なのでしょう。また、プロデューサーやディレクターなど他のスタッフと考えが異なった場合、どう対処すればよいのでしょうか。事実を表現するのに必要最小限の条件は何になるのかということをお聞きしたいと思います。

私たちは、科学とコミュニケーションに対する情熱と正当な根拠を持ち合わせています。優れた映像は情熱をもった人達によって創られ、正当な根拠のもと様々な障壁を乗り越えてゆきます。科学映画制作の究極的な目標は、根拠にもとづく情熱を通じて、感動を伝えることではないでしょうか。単に事実を伝えるだけでなく、記憶に残るようなものを制作する必要があると考えます。

ディスカッション

参加者 久保正敏、 ローレンス・オレイリー、 平田光司

久保 自然科学映像というと、すべてが間違いのない真実であるという思い込みがあると思います。それが、『地球の薄暮』のように大げさに表現された場合、驚いたり悲観的になってしまったりすることもあるかもしれません。ですから表現方法と内容のバランスに、見る側も常に批判的でなければならない、ということがオレイリーさんの講演の大きなポイントだったと思います。

もうひとつは、自然科学映像を制作する際に、科学者、プロデューサーする人、そして実際に制作する人といういろいろな立場の人が、チームワークを組んで映像はできあがりますが、その役割の分担の仕方についても、ポイントがあったと思います。

平田 科学的な正確さと、映像表現のバランスという言い方をされましたが、もしも映像が科学の中身を伝えるものだとすれば、それは科学的でなければならないと思います。しかし、果たして映像は科学の中身を伝えるものであるのかということ、必ずしもそうではないと思います。映像を制作する人の意図として、それは正しい科学を伝えようと思いつくっているのか、または別の意図があるのか、むしろつくっている人にお聞きしたいと思います。

オレイリー

理想的には、映像の内容と台本の中身のふたつがあわさったときに、違和感のないようなバランスにすべきだと思います。

とくに映像を制作する初期の段階では、台本は何度も精査され、修正されます。昨年この映画祭でお見せした『ガラパゴス』を制作した際は、自然史博物館内外から科学者を集めて委員会をつくり、科学者のコメントを求めました。わたしたち制作チームは、この台本の内容でいける、正確だという段階まで科学者チームとの合意を目指し、待とうという気持ちでいました。

科学を一般の人びとに伝えるには、事実を伝えるだけではだめだということです。一般の人たちの知識の程度を、制作する側が理解することが重要です。そしてなるべくシンプルなかたちで伝えることが重要です。

会場 先日、NHK の科学映像制作者と話をする機会がありました。科学者の言葉を映像にする際に、科学者とのあいだのコンフリクトをどう対処するのかとお聞きしたところ、「制作者は制作者の意図があるんだ」とはっきり言いました。「たとえば研究者が30年やってきたことを5分の映像で見せるとしたときに、研

究者自身はできないけれども、私たちはできるという意志がある」と言いました。確かにそういうこともあるのではないかと思います、いかがでしょうか。

オレイリー

よくわかります。世界中状況は同じです。私がひとつアドバイスできるとすれば、チームを構成することだと思います。一緒に作り上げてくれるメンバーですね。科学者一人ではなかなか難しいと思うんです。「数には力がある」と英語でもよくいいますが、科学者ひとりではできないことも、たくさんの人がいればできる。良い事、悪い事も、数がそろっていることで、真実味を帯びてくるという事です。ディレクターなどに対して物申すときも、科学者ひとりでは難しいことです。ここで難しい問題になってくるのは、事実そのものではなくて、事実の解釈になりますので、数に力があるというのはそういうことです。

久保 科学に対する一般市民のとらえかたも、アメリカと日本では少し差があるということも含めて、今のお話を聞いていただければと思います。映像をつくり出す側と、受けとる側とは、まったく別のカテゴリーにいるとは考えず、見る側もそのまま受けとらずに、「これはおかしい」と批判的にみていく。コミュニケーションのツールだということをあらためて考えることが重要だと思います。映像をつくる側のなかでもコミュニケーションは必要ですし、見る側も含めたコミュニケーションも必要です。これから自然科学映像をつくっていき、そして考えていく機会を、民博は総合研究大学院大学と一緒にもっていきたいと思います。

みんなくシネマ—科学映画祭—
外国から見た日本文化

2008 年2 月9 日(土)12:30 ～17:40

『老人と海／ Uminchu』

『日米のダブルス』

トークとディスカッション

2008 年2 月10 日(日)12:30 ～17:45

『歩き遍路』

トークとディスカッション

『ヒロシマ・ナガサキ』

2 月9 日

趣旨説明

久保正敏

1月に引き続き科学映画祭の一環として、「外国から見た日本文化」という大きなくくりで、本日と明日にわたって各2本の科学映画を上映致します。

前回は自然科学系の映画をとりあげましたが、今回は人文社会科学の観点からえがかれた映画を上映することになりました。

今回はとくに、外国の映像作家・制作者が日本文化をどうとらえているか、という観点から上映作品を選定致しました。

これらの作品では日本人が日常気づかないような日本文化のいくつかの側面、海外からは大きな関心をもたれているけれども、これまで日本人があまり関心をよせてこなかった問題がとりあげられています。

外国から見た日本の像、つまり自画像としてではなく他画像を通して、我々日本人にとってもあらたな発見が得られるのではないのでしょうか。

本日は、上映作品をご推薦いただいたエレーヌ・シャルノーヴさんに

ご出席いただいております。彼女はニューヨーク市自然史博物館に所属し、マーガレット・ミード映画祭をはじめ、さまざまな映画祭のプロデュース、ディレクションを行なってこられました。上映の後、エレーヌ・シャルノーヴさんのお話とディスカッションの時間をもちたいと思いますので、ぜひ、最後までお楽しみください。

解説

エレーヌ・シャルノーヴ

Elaine Charnov

ニューヨーク市自然史博物館

マーガレット・ミード映画祭 アートディレクター

今回の映画祭で上映される作品のうち、3本を推薦しました。なぜこれらの作品を選定したのか簡単に説明したいと思います。

まず最初に、『老人と海／ Uminchu』について簡単に説明します。監督のジャン・ユンカーマンはアメリカのウィンスコンシン州ミルウォーキーの出身です。アカデミー賞にもノミネートされるなど多くの受賞経験をもち、優れた映像作家として高い評価を得ています。

彼は長いキャリアを通して、原爆、日本文化と芸術、そして日本庭園など日本を対象とした多くの映画を制作し、名匠として成功をおさめてきました。

そんな彼の作品の中でも『老人と海／ Uminchu』は特別なものだと考えます。制作のために、とても長い期間が費やされています。舞台である与那国島に2年間にわたり通い続けました。漁師への深い洞察力と、温かい親しみが感じられます。さらに興味深いことはそのタイトルです。『The Old Man and the East China Sea』はヘミングウェイの文学作品『The Old Man and the Sea (老人と海)』と関連づけられています。そこには東洋と西洋のつながりが感じ取れます。

もうひとつお伝えしておきたいことがあります。撮影終了後間もなく、主人公の漁師は死亡してしまいました。漁の最中、網に絡まってし

まったのです。82 歳という高齢にも関わらず、精力的で、才能にあふれた人物でした。

次に『ダブルス』についてお話します。この作品はレジー・ライフが制作しました。彼はニューヨーク在住のアフリカ系アメリカ人で、映像作家としてだけでなく、演劇作家としても活躍しています。彼が日本文化に興味をもつようになったきっかけには、とても面白いエピソードがあります。

ニューヨーク大学で映画を学んでいた頃、授業をサボって自主上映館に行き日本映画を観ました。そこで彼は大きな衝撃を受けます。特に山田洋次監督の『寅さん』シリーズに強い印象を受けたようです。その後彼は奨学金を得て6カ月間日本で学ぶことになります。

レジー・ライフの映画作りのひとつの目標は、人びとの会話における力強さや活気を伝えることでした。私はそれが成功したと考えています。

『ダブルス』の撮影には英語を話せないカメラマンが参加しており、意思の疎通はとても興味深いものでした。レジーが指をひとつ立てるとクローズアップのショット、指二つでミディアムショットといった具合です。単純ですが活発な交流が生まれていました。

彼がこの作品の制作に興味をもったのは1995 年のことです。広島・長崎に原爆が投下されて50 周年にあたる年で、あまり世界に知られていない事実を伝えることに強い関心をもったようです。

この作品は、日本のNHK とアメリカのPublic Broadcasting Systemで放映されました。

最後にお話するのは『ヒロシマ・ナガサキ』です。この作品はスティーン・オカザキ監督の作品です。彼はアメリカ・カリフォルニア州ベニス生まれの日系3世です。1991 年にアカデミー賞をドキュメンタリー部門で受賞するなど高く評価されている監督です。彼は幼少の頃、アメリカのパブリックスクール制度のもとで教育を受け、あまり戦争について知っていませんでした。やがて、戦争のことを深く知るようになり強い衝撃を受けます。そして、将来映画監督になり、世の中

で知られていないことを公開する道を目指します。

1980年代、サンフランシスコで広島・長崎の原爆生存者たちに出会い、彼らの集会に出席するようになりました。そこで、表にはでてこない彼らの葛藤などを学んだのです。その後25年間、作品の実現に創造力と熱意をそそぎ続けます。そして、Home Box Office(HBO)の協力を得てそれが実現することになりました。

この作品のために、500人の原爆生存者に会い、100人へのインタビューを集中的に行ない、作品に登場する40人を決定しました。さらに、NHKが1975年と95年に、原爆生存者から募った絵画を作品の中で紹介しました。

インタビューによる言語表現と絵画を通した映像表現が融合し、力強い作品が生まれました。

これらの3つの作品を私が選んだ理由は、映像表現の形式には、観測的手法だけでなくインタビュー手法まで幅があることを伝えたかったからです。人びとの会話から生み出される力により、表にはでない文化の一部が紹介できたのではないのでしょうか。

ディスカッション

参加者

エレヌ・シャルノーヴ、大森康宏、久保正敏

シャルノーヴ

映画『ダブルス』で登場した人びとと同様、日米など多文化の背景をお持ちになっている方、あるいは、ご自身でなくても友人や周囲のひとたちの中にそういう方がいらっしゃればお聞かせください。

会場 7人の従姉妹のうち一人がオーストリア人の外交官と結婚しています。

彼女の息子は一般的な日本の学校に通っていました。彼は外国語が話せるとか、外見が格好良いなどで、相当人気者であったよ

うです。

他方、もう一人の従姉妹は日系アメリカ人の弁護士と結婚しています。夫がスポーツジムにでかけ、そこでお風呂に入ろうとしたとき、順番が違うなどという指摘され、いやな扱いを受けたそうです。二度とあのようなところには行きたくないと言っています。

この二つの例から、相手次第、本人次第、コミュニケーションのとりかたで様々な状況が生まれているのではないのでしょうか。

大森 映画『ダブルス』のナレーションをしていたジョン・カビラは私の遠い縁戚にあたります。彼の父親は日本人、母親がアメリカ人です。彼は幼少のころ沖縄でくらしていましたが、当時は差別を受けていたようです。その後、父親の方針もあり、アメリカで教育を受けます。アメリカで教育を受け、成人になってから日本にもどることで特性がいかせるというのが父親の考え方だったのです。実際、カビラは現在、自分の特性をいかして活躍中です。

グローバリゼーションがすすむなか、日本の文化をオープンにし、反対に外国の文化を受け入れる体制ができつつあるのではないのでしょうか。

相手を尊重し、お互い尊敬しあい共存することに重点をおく教育も必要だと考えます。

シャルノーヴ

映画がNHKで放映されてから、さまざまなプラスの反響がありました。再放映を求められたりしましたが、次のような反応もありました。

映画のなかで、顔を影に隠して話していた女性がいます。自分自身を特定されたくないとの彼女からの要請があったからです。放映後、彼女から再撮影し、顔を映してほしいとの要請がありました。差別から身を隠したいという気持ちから誇りへと心

境の変化が生まれたのだと思います。

久保 映像のポジティブな力を再認識させられたように感じます。

映画が制作された年は、第二次世界大戦終戦50年の節目の年にあたります。そのようなことが、客観的に物事を見ようとするムードにつながったのでしょうか。

シャルノーヴ

文化の違いを距離をおいて見るきっかけになったのだと思います。

久保 国際化の時代に様々な背景をもった人びとをどう見るのか。自分自身の立ち位置から見て上か下かという視点ではなく、多様性を尊重する考え方が重要なのだと思います。そのことは、ここ国立民族学博物館の考え方、民族学・文化人類学の視点の基本でもあります。

2月10日

趣旨説明

松山利夫

国立民族学博物館 民族社会研究部教授

本日は二つの映画を通して外国から見た日本文化について考えていただこうと思っています。

外国からの視点で日本をとらえる場合、いわゆる伝統文化に視点が偏重する傾向があります。しかし。今回上映する映画は、ともに現代の日本をそれぞれの立場から記録したものです。

ふたしかな現代を外国人が制作した映画を通して、あらためて考えることができるのではないのでしょうか。

『歩き遍路』は母をなくした青年が四国巡礼をする物語です。現代に生きる青年の存在と思考をドキュメントしたものです。

『ヒロシマ・ナガサキ』は、たいへん重いテーマで、軽々しく論じることとはできませんが、そこで語られているのは1945年の日本ではなく現代の日本であるということを感じとってください。

上映後のトークとディスカッションにもぜひご参加ください。

解説

トミー・メンデル

Tommi Mendel

チューリッヒ大学 宗教学部 研究員

簡単にですが、作品の背景と完成までの経緯についてお話したいと思います。

私はチューリッヒ大学で、社会人類学を学びました。人類学には数年にわたる調査が必要です。この調査自体が作品制作の一環ということができます。実はこの作品そのものが、私の修士論文なのです。より広い人びとに伝えるために、執筆ではなく映像制作を論文にしようと決めたのです。それに、私の妻は日本人です。結婚生活を円滑なものにするためにも日本文化を学ぶことは重要です。調査地を日本にすることにより、それも可能になりました。

2003 年、愛媛県松山市に行く機会がありました。朝早くに石手寺を訪ねた際、50 歳代半ばの歩き遍路の男性と知りあいになりました。彼は 40 日間にわたる巡礼の途中でした。その時、はじめて巡礼のことを知り、様々なお寺に行き、文字や言葉で表せない巡礼者の想いや、風情を映像作品にしようと考えに至りました。

日本人が 40 ～ 60 日という長い期間を日常の環境から離れ、歩き遍路を行なうことに、強い関心をもつようになったのです。

帰国後、文献等を用いて、四国遍路や巡礼一般、日本の文化全般にわたって調査しました。もちろん映像人類学についての研究も行ないました。

実際の撮影では、巡礼者の動機に焦点をあて、さらに精神の質的変化を 9 カ月かけて調査しました。撮影は私と妻の二人で行ないました。男性と女性、外国人と日本人というのは良い組み合わせだと思いました。ただし、巡礼者のなかには、自分をみつめなおすため、孤独を求め

る人も多く、カメラで撮られること、特に外国人のカメラで撮られることを承諾してくれる主人公が見つかるのか不安でした。しかし、幸いにも素晴らしい歩き遍路に巡り会い、36 日間一緒に過ごすことができました。

フィルム編集後、主人公に映像を見せました。作業結果を知らせ、本質を伝えるという映像人類学の理論のひとつです。

スイスに戻ってから最終工程を済ませ、国際的映画祭等で上映を行ないました。

そこで興味深かったのは、スペイン、サンチャゴ・デ・コンポステーラ巡礼の関係者の方々から多くの質問を受けたことです。

どのような準備を行なったとか、キリスト教とは異なる四国巡礼の様子に関し、質問を受けました。

私自身、巡礼を行なう動機などについて強い関心があり、それ以来、様々な情報を交換しています。将来的には、サンチャゴ巡礼についても研究したいと考えています。つまり、私のこの分野における研究は完結していないのです。

ディスカッション

参加者

大森康宏、平田光司、エレヌ・シャルノーヴ

大森 1999 年頃からサンチャゴ巡礼を映像におさめることに関心をよせ、実際に2 年をかけて約1400 キロメートルを歩きました。サンチャゴでは四国巡礼とは異なり、「お接待」はなく、基本的に自分自身ですべてをやらなければなりません。しかし、行政が宿泊施設を整備するなどのサポートをしており、日本の場合とくらべて安い費用で巡礼することが可能です。

日本では各県単位で観光とかねあわせた事業は行なわれていますが、そこには宗教的意味は存在しません。スペインやフランスなどと異なり、日本では、行政がひとつの宗教に偏って支援す

ることが禁じられているからです。

巡礼への支援のやり方には、それぞれの国によって違いがあるということです。

もうひとつ面白い現象があります。四国巡礼における歩き遍路の人たちは寺への参拝に強い感心をもっています。一方、サンチャゴの巡礼者の場合は歩くこと自体に意味があり、教会にはあまり興味をもっていません。

ヨーロッパの人びとの日常生活がキリスト教と密接な関係をもっているのに対し、日本では信仰心は曖昧な場合が多いように考えます。そういう日本人にとって巡礼は信仰心を確認する機会となり、お寺を回ることによって自分自身をも確認しているのではないのでしょうか。

なるものに達しようとする巡礼は、自分のこれからの人生をどうプログラムするか、どんな仮説を立てるか、ということでもあります。それは、自然科学における仮説と実験との関係と何ら変わらないと考えます。

全世界で、科学というもののあり方を共通のものとして見る、人類にとって科学とは何かを考える必要性が高まっています。そこに含まれている問題は、聖地巡礼のなかに含まれている問題と同じではないのでしょうか。

平田 専門は物理学ですが、最近中心として行なっている研究は、科学と社会の関係、科学技術社会論という分野です。科学をどうやって市民に伝えるかということですが、簡単に言ってしまえば、科学の宣伝映画を制作するということになります。しかし、そこに、科学を行なっている人間、科学者の人間像、彼らの間で交わされているコミュニケーションつまり社会的関係に焦点を当てることが重要だと考えています。

本日の映像を見て、自然科学がものすごく進んで、生活が便利になるなかで、取り残されている重要なものを、遍路する人びとが表しているように感じました。自然科学が人間の心をはなれて

すすんでいるのだということを実感させられる映像でした。しかし、その一方で、科学者自身、研究を通じて遍路をやっているとすることもできます。科学者たちが研究の過程で何を考えて過ごしているのかを表現する映像ができれば素晴らしいと考えております。

1 月に上映した大森先生の作品『高エネルギー加速器研究機構 (KEK) の研究者たち』は、科学者の言葉をおっていく映像です。ここに科学映画における、これからの方向性、目標がみえてきたのではないのでしょうか。

シャルノーヴ

自然科学をあつかったものと、文化をとらえているものとをどうやってつなげるかについては、それらの映像をどういった会場で上映するのか、ということも重要になってくると考えます。そういった意味で、多文化理解の環境が整っている国立民族学博物館のような場所は最適であると考えます。

物質的な内容と、心の問題つまり精神的な内容を関連づけるのが映像だと考えます。そしてその媒体がビデオであるということもキーワードになります。簡単にアクセスでき、誰でも入手できる媒体であるということが重要です。